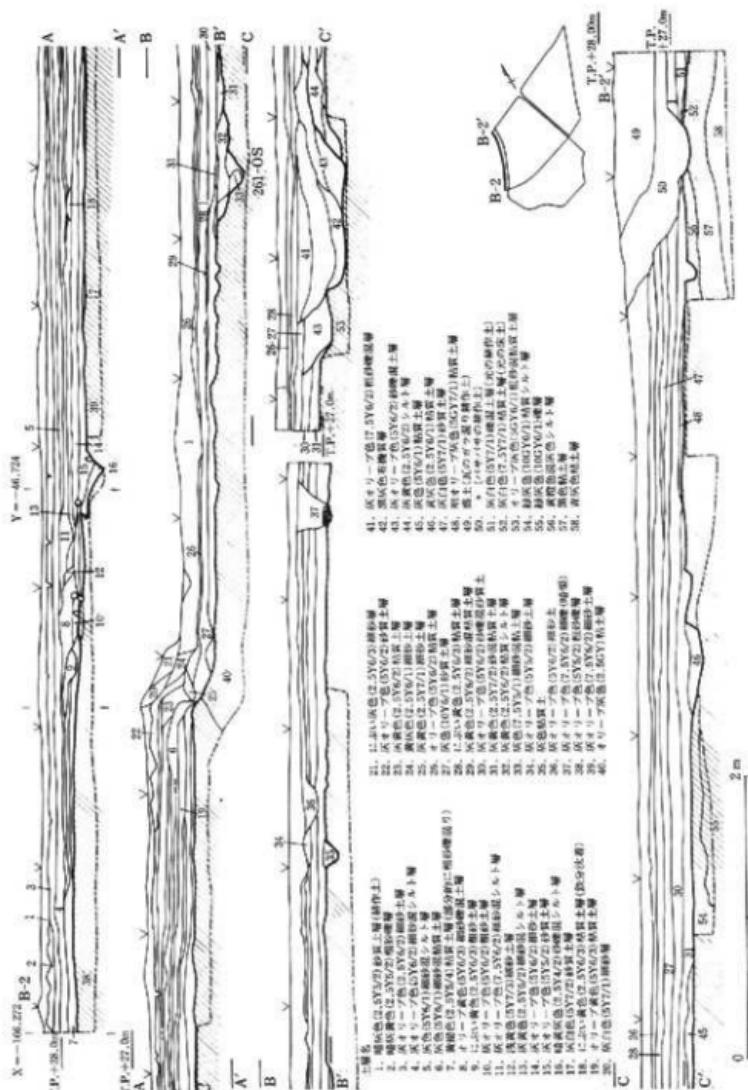


第12図 B地区・河道土層断面図



第13図 B-4地区・土層断面図 (B-2)

るやかかつ長時間をかけて堆積したと考えられる。縄文流路4は、下層の砂礫層上に分厚い粘土層を被る。壁は、急激な流れを物語るように抉れが顕著である。壁上部にも抉れがあるが同一レベルでは粘土が堆積していることから急激な流れの時には上部まで達していたと考えられる。縄文流路5は、土層断面の東側と中央部（幅23.8m、深さ2.5m以上）の2つの流路を確認した。東側流路の壁は、急激な流れによって抉れ砂礫層が堆積しその後、シルト、粘土層を中心とする層位で構成されていた。中央部の流路は、オリーブ灰色シルト層が主体を成す。西壁面のへこんだところは、砂礫層が同一レベルで堆積していた。東壁面は、シルト層を大きく抉りとる激しい流れがある時期に存在したことを見出す。縄文流路6（幅8.1m以上、深さ1.4m）は、西岸寄りで検出した流木を多く含む有機質の粘土から判断して、静水状態におかれていたことが判る。壁面も他の様に抉れはない。縄文流路7は、縄文流路3・4・5を包括する流路である。シルト層を主体としていた。縄文流路8は、縄文流路3・7と共に中央部での流路の痕跡を残すように堤状になっていた。この流路のベースは、粘土を主体とするベルト層である。それぞれの流路からは、年代を決定付ける遺物は、検出されていない。縄文流路の構成順序は、流路8→7→3→4→6→5→2→1と考えられる。

流路は概ね南東から北西に向けて流れていたことが東壁面土層断面図との照合によって判る。このような堆積状況は、石津川下流の伏尾遺跡B地区、小阪遺跡においても知られている。

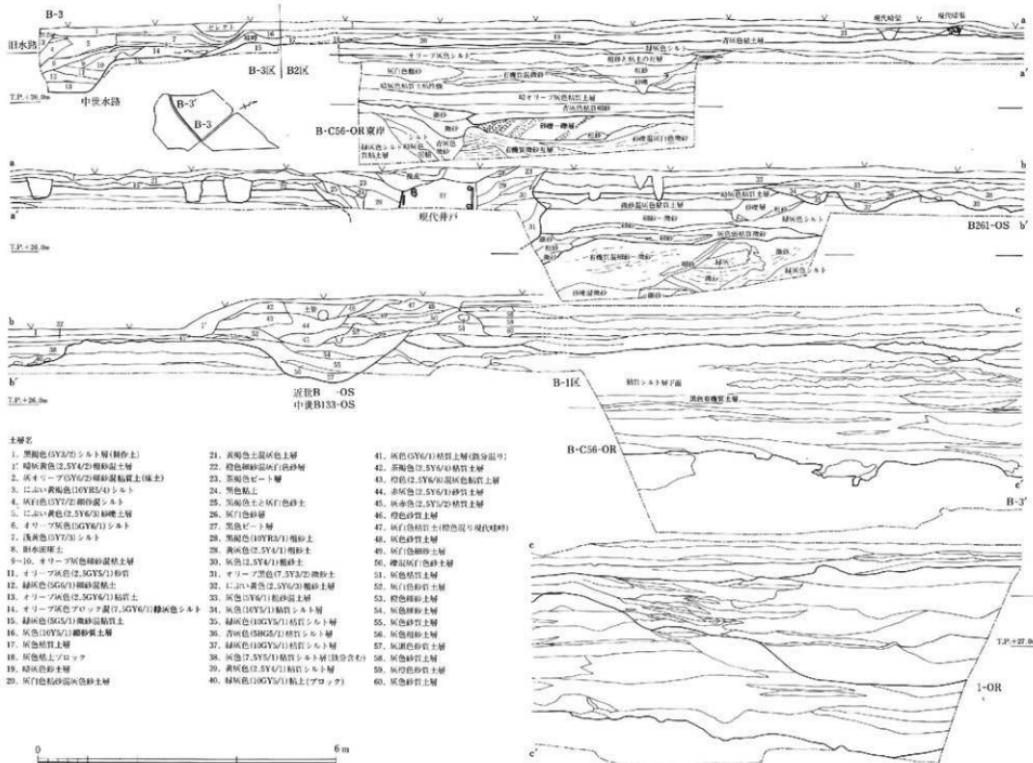
C地区谷直交土層断面図（C-1）（第15図）

このセクションは、南西から伸びてくる丘陵端部から石津川の氾濫原を含む位置に、等高線に直交するように設定した。

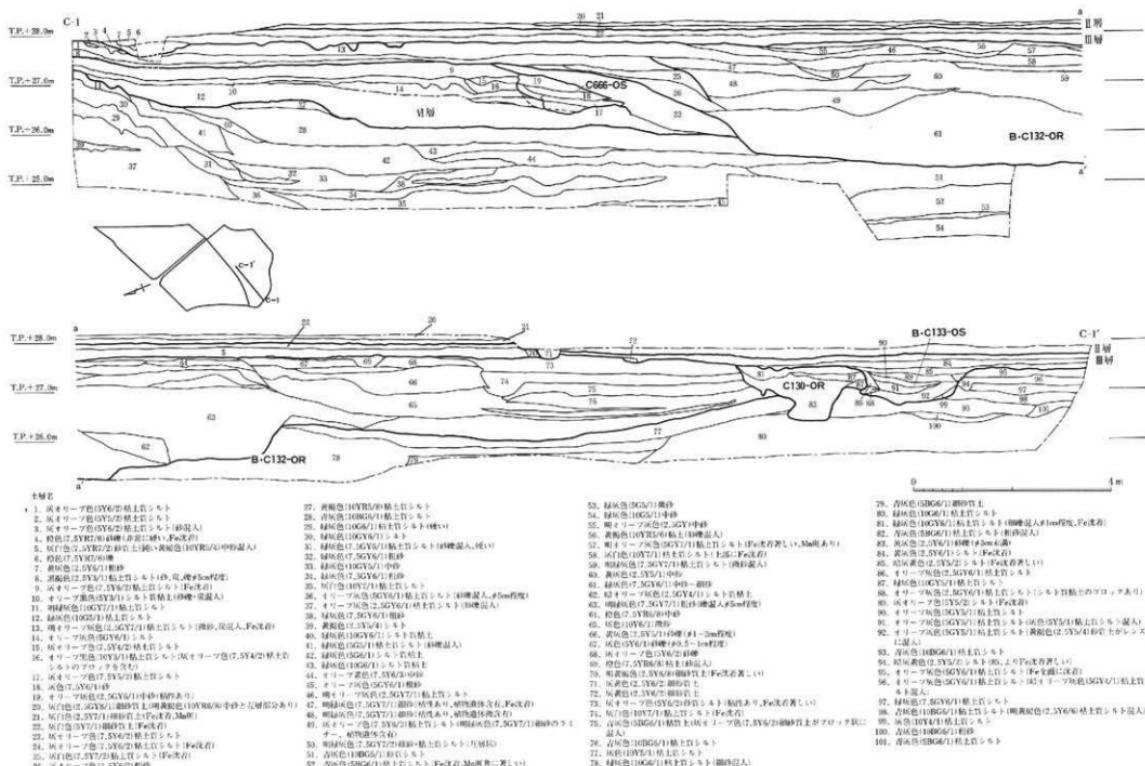
第I層 現代耕土層。第15図には表われていない。

第II層（20・21） ほぼ水平に広がっている。調査区の西と東とでは約30cmの段がついている。基本的に灰白色砂質土であるが、さらに2つに細分される。上面のレベルはT.P.+28~28.2mで層厚10~20cmを測る。出土遺物は近世の陶磁器類と共に、須恵器、土師器等である。この層の上面では、いわゆる鋤溝と暗渠が検出されている。

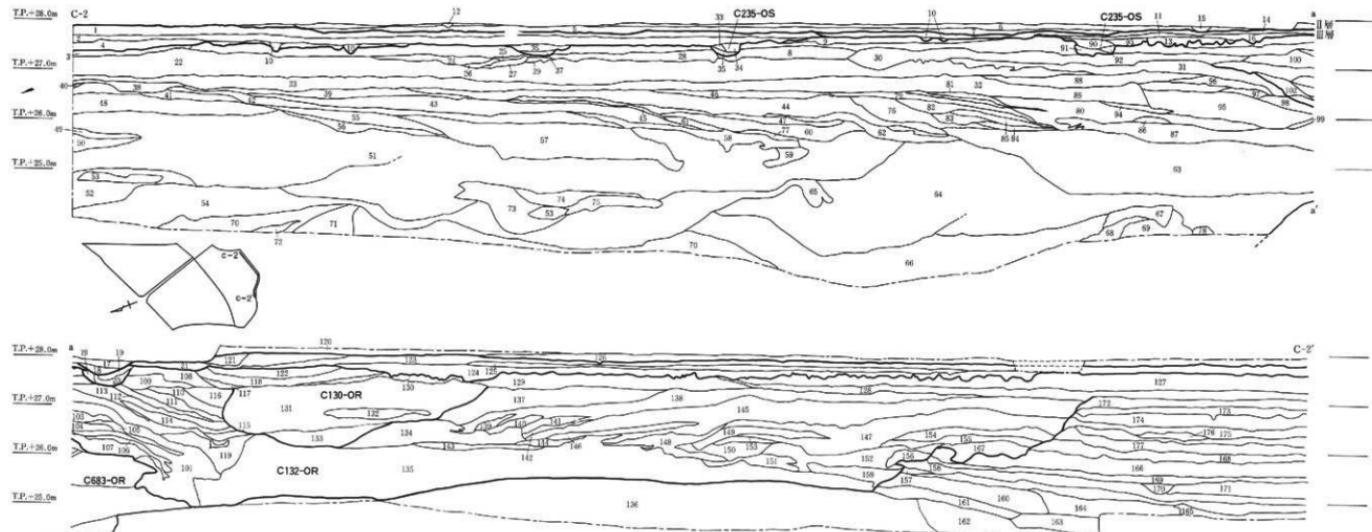
第III層（5・22） やはり水平堆積で調査区全体で認められる。この層は2つに細分される。やはり灰白色砂質土からなる。第2層に比べてMn斑の量が多く、褐色が強い。上面のレベルはT.P.+28.0mを測り、層厚は25~35cmである。5層、22層共に瓦器、須恵器、土師器、陶磁器、瓦が豊富に出土している。北西部では古墳時代の須恵器が、北東部



第14図 B地区・土層断面図(B-3)



第15回 C地区・谷底土層断面図（C-1）



第16図 C地区・南壁土層断面図 (C-2)

では奈良時代の須恵器が多く出土している。全体的に見ても、中世の遺物より古墳時代から奈良時代の遺物の方が多い。これらの層も耕作に伴って形成された層と考えられる。

第VI層（13・56以下）　調査区全体に広がっている。C132-O-Rの中の堆積層と、それを覆う水平堆積層である13層、1層からなる。上面のレベルはT.P.+26.0mを測る。

C132-O-Rには2時期の切り合いがある。古い方をC132a-O-R、新しい方をC132b-O-Rとすると、C132a-O-R、1層、C132b-O-R、13層の順で堆積したことになる。13層は明オリーブ灰色粘土質シルト層、1層は灰オリーブ色粘土質シルト層である。これらの4つの層は、遺物の上から時期差を認めることはできない。

また、西端では、丘陵の斜面から流れてきたと考えられる、やや炭を含むオリーブ灰色粘土質シルトが見られる。この層は1層が堆積し始めたのとほぼ同じ時期に流れ込んできたようである。炭が若干混じるのは、調査区の西にある濃登ノ池に存在すると言われる窯と関係があるかも知れない。

土器群は、先のオリーブ灰色粘土質シルトと1層が堆積していた時期に形成されたと考えられる。

この13層の上面で奈良時代と中世の遺構を検出した。

第VII層（9～12の間）　遺物の量は少ないが弥生時代の包含層も存在する。最上層である9層の灰オリーブ色粘土質シルト層からは、タタキ目の入った土器片が僅かに出土している。この層は調査区南西部に部分的に広がる層である。その下の15層の灰オリーブ色粘土質シルトからは遺物の出土を確認することができなかった。布留式期の溝はこの層を直接切っている。

その下に、2枚目の黒色の薄いバンドである10層のオリーブ黒色シルト層がある。この層も部分的に認められるだけで、遺物の出土もなかった。さらに14層のオリーブ灰色シルトが10cmほど堆積し、12層の緑灰色粘土質シルトとなる。そしてT.P.+26.1mのところで前期の土器が出土した。この土器は、50cmにわたって堆積している12層の緑灰色粘土質シルト層の最下部に含まれていたものであるが、量は非常に少ない。

地山（27以下）　遺物の出土はないということで（27）層以下を地山と考えた。他の調査区の状況から考えると、縄文時代に相当する層を含んでいるかも知れない。調査区の西端ではT.P.+27.1m、中程ではT.P.+25.8m以下のところで、固くしまった緑灰色粘土質シルトを始めとするシルト系の土層が堆積している。

そして調査区の西隅ではT.P.+26.5mで、緑灰色砂礫混じり粘土質シルト層を検出し

ている。この層は西から東に向けて約30°傾斜している。洪積層の崩落土と考えられる層である。

C地区南壁土層断面図（C-2）（第16図）

第Ⅰ層 現代耕土層

第Ⅱ層（6・7） ほぼ水平に広がっている層である。上面のレベルはT.P.+28.0mで層厚10~20cmを測る。こちらでも、上下2層に分かれ、上の層が黄灰色シルト、下の層が灰白色粗砂である。

第Ⅲ層（1・2・4） 上面のレベルはT.P.+27.8mを測り、層厚10~30cmである。上下3層に分かれる。1層が灰色シルト、2層が灰色粘土質シルトであり、これらは先の5層、22層に対応する。調査区の南東部では、その下に4層として黄灰色粘土質シルトが認められる。この層からは奈良時代の須恵器が多く出土した。

第VI層（3以下） T.P.+27.4mのところで確認した。ほとんどがC132-O RとC683-O Rの堆積層である。

地山（136） T.P.+25.6m前後のところから緑灰色粘土質シルト層を確認した。この層は固く締まっており、地山に相当すると考えている。

第2節 遺構・遺物

第1項 繩文時代

A122-O O（第17図）

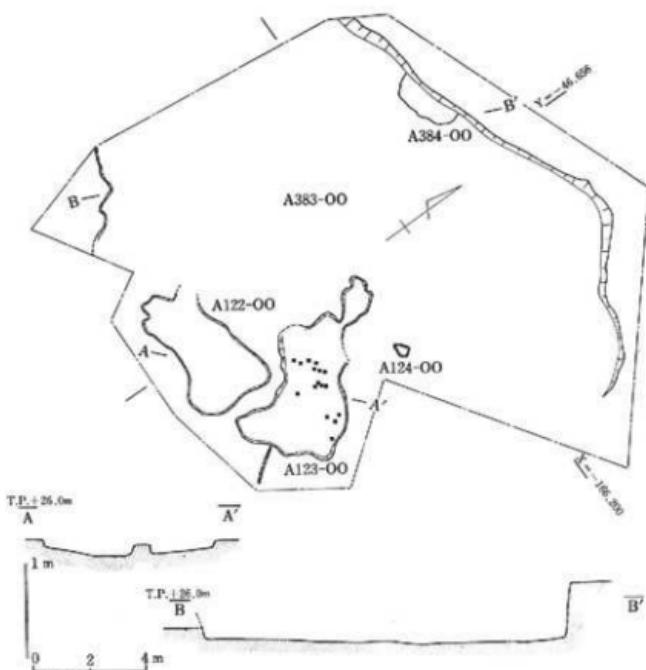
調査区の南で検出した不定形な平面プランをもつ土壙である。北西のプランは不明確である。急激に落ち込み深さは約10cm前後である。底部は平坦である。埋土は単純な1層のみであり遺物は出土しない。ベースは、青灰色シルト層である。

A123-O O（第17図）

調査区の南で不定形土壙を検出した。最大長約2.0m、深さ10cm内外を測る。急激に落ち込む。底面は平坦面を形成する。埋土は1層で単純である。遺物は土壙の底面よりわずかに浮き上がって出土している。繩文土器が主であるが石器のチップも出土する。土壙の東南部には木材（長さ1.3m、径10cm）が出土し、表面は焼けていた。

A124-O O（第17図）

調査区の東部、A123-O Oの東で検出した。不定形の土壙で1×1.5mを測る。深さは10cm前後である。埋土は1層であり遺物は出土しない。



第17図 A122・123・124・383・384-OO遺構図

A 383-OO (第17図)

調査区の全域にわたって落ち込む土塙で、北側と西南部の2箇所でのみ肩を検出した。約0.6m垂直に落ち込み底面の形状は平坦である。この土塙の底からA122・123・124・384-OOの各遺構が検出された。出土遺物は実測不可能な縄文土器が多数出土した。

A 384-OO (第17図)

調査区の北部で検出した7×2mを測る方形の土塙である。なだらかに落ち込む。埋土は炭化層の1層である。遺物は出土していない。

A地区縄文土器 (第18図)

A109はA111の土器と共にA383-OO内より出土した。この土器の他にも、3~4cm四方の縄文土器片が多数出土しているが埋土と同化していた。三角形の断面は、1.6cmの厚みで中央部のみ0.7cmと薄く、大きくへこんでいる。A111と共に生駒西麓産の胎土をも

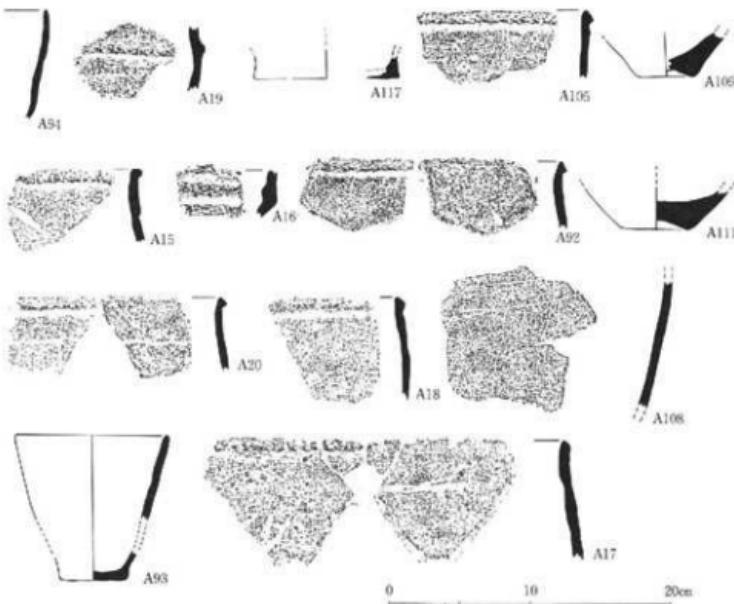
つ土器である。2mm程度の石英・長石を含み、角閃石や金雲母も含有する。中央部のへこみは、棒状のもので押している。底部径3.0cm。

A111は底部径4.2cmでA109よりやや大振りである。底部は、2.2cmの厚みで中央部は1.1cmとすく、大きくへこんでいる。胎土、焼成などは、A109と全く同じである。外面は、チョコレート色で内面は火のまわりが悪く黒褐色の色調である。生駒西麓産の土器である。

A108は深鉢 繩文河川内出土（K14AQ）GL-5.3mで検出した。ローリングを全く受けていない内面は、ヨコ方向のヘラ状工具でナデしており炭化物が付着していた。厚みは、0.4cmである。外面は、ローリングを認めるがケズリとミガキが行われていたと考えられる。在地産の土器（A117も同じ）で石英・長石が異常に多い。

A117は繩文河川 K14AQ地区出土、在地産の土器である。GL-4.0mで検出した。胎土・焼成は、A117と同じであり平坦な底部は、径8.5cmを測る。

A94は青灰色シルト層（縄文時代の第二次面のベース面・A383-OO内）出土、深



第18図 A地区出土縄文土器

鉢、頸部が内傾するタイプである。外面はヘラケズリ、内面はヘラ状工具とナデ仕上げである。内面には、約3.0cm幅の粘土紐痕が認められる。最大0.8cmの長石を含む生駒西麓産の土器である。

A15はこれより以下の土器と同じく、縄文時代第1次面（明黄褐色シルトK09V R地区出土）に穿たれた不明瞭な不定形土塙らしきところより一括して検出した。埋土は、明黄褐色粘質土であった。この堆積の状況、色こそ異なるが質は、第2次面と同一形成である。口縁部端部に三角形の突帯を貼り付けておりかすかに爪形文がみられる。生駒西麓産の深鉢である。

A16は深鉢 口縁端部は、引き上げ内側に丸く巻き込む、口縁部より少し下がった所に両面とも凸帯を有する。多少、器面の剥離が進んでいる。生駒西麓の土器である。

A17は深鉢 おおざっぱな爪形文を施した凸帯を口縁端部に貼り付けている。7.5cm下がったところに2段目の凸帯がみられる。口縁端部より3.2cm下がったところに粘土紐がある。生駒西麓産の土器である。0.7cmに達する長石が目立つ。

A18は深鉢で長石・石英粒が多い、生駒西麓産の土器である。外面口縁端部下の2.5cmに粘土紐痕がみられ内面にも同一粘土紐痕が端部より3.3cm下にある。口縁端部には、三角形の凸帯が貼りついているがおそらく施されているであろう爪形文は進行した剥離のため見つけられない。

A19は深鉢の胴部で2段目の貼り付け凸帯にあたる部分である。約0.7cm間隔の爪形文を施す。生駒西麓産他の同種の土器と同じく0.5cm程度の厚みをもつ。

A20は口縁端部は、シャープな三角形の貼り付けられた爪形文の凸帯である。口縁端部より下へ2.7cmのところで粘土紐痕と考えられる部位で割れている。テクニックは、剥離のため不明である。

A92はかすかに残る爪形文を施したシャープな口縁端部は、貼り付けである。A20と共に生駒西麓産の土器である。口縁端部より下へ2.9cm前後の所には、粘土紐の痕跡が認められる。A20と同種の深鉢である。

A93は生駒西麓産の土器である。他の深鉢と異なり底部より直線的に外傾する。口縁端部より下へ3.2cmの所には、粘土紐がみられる。平底の底部には、基部を丁寧に指押えしている。ちなみに、生駒西麓産の土器は、在地産のそれよりかなり薄手である。最大0.5mの長石を含む。

A105は幅広い爪形文の貼り付け凸帯を有する。内面には、指圧とナデ仕上げであるか上面は剥離のために確認出来ない。深鉢の口縁部で生駒西麓産の土器である。

遺構からは、繩文河川内出土（A108・109・111・117）繩文時代下層面（A139）繩文時代上層面（A15～20・92・93・105）に別けられる。繩文時代晩期である長原式期の土器である。石津川流域における同時代の遺跡としては、上遺跡、四ツ池遺跡、鈴の宮遺跡、西浦橋遺跡、小坂遺跡、伏尾遺跡B地区、浜寺船尾西遺跡が挙げられる。

A地区石器（第19図 図版99）

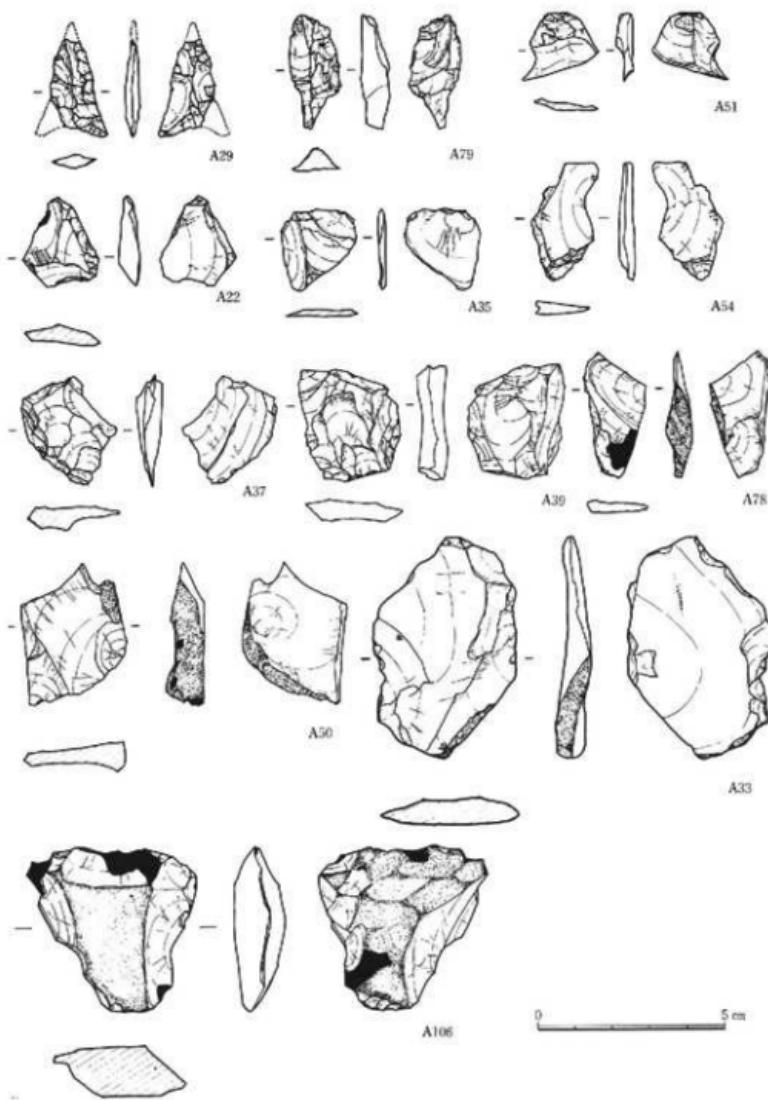
A22は凹基無茎石鏨の末製品である。第VII層、K09 Y L地区出土、長さ3.4cm、幅2.1cm、厚さ0.6cm、石材は、サヌカイト A面（左側の圖を便宜上、A面、右側に載せた圖をB面とした。）A・B面の右側縁は、縁どりをするためにカットはじめている。概ね三角形を呈した石取りが行われ左側縁のカットによって石鏨の中央になるような稜が出来ている。左下に打溜がありA面より扁平である。

A29は凹基無茎石鏨 第VII層、K14 A N地区出土、長さ3.6cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、サヌカイト製、A面の上端部は、発掘調査時の欠損であるが左逆刺は使用当時に欠落したらしい風化状態である。B面よりもA面の方が細かいカット調整が入っている。右えぐりのカットは、仕上げ状態となっている。A・B面ともに石鏨のバランスをとるための中央部での稜線は、比較的明瞭である。B面の左側縁部は、ネガティブな剥離によって中心部の稜線を成す。

A33は不定形石器、繩文河道内、灰褐色砂礫層（G L - 5.2m下）川の中にあったため表面が相当磨滅しておりカットの稜線が観察されにくい。右下側面には、自然面が残る。ポジティブなB面には、打撃による剥離が2カットとしてあらわれた。エッジの手前のカットには、バルバースカーがみられ階段状剥離となっている。節理が縦方向にみられ右側面を刃器として利用していた。

A35は剥片 第VII層・下層K09 A K地区出土、長さ2.2cm、幅2.0cm、厚み0.2cm、A面には、大きく三つの剥離面がみられ極めて薄い。B面の上端部には、打溜がみられリングやファイシャーがよく観察された。

A37は剥片又は不定形刃器 K14 A N地区出土 長さ2.95cm、幅2.5cm、厚さ0.7cm、B面は、ネガティブな面が3つみられる。A面の左側縁部は、不定形刃器の刃部と言えなく



第19図 A地区出土石器

もない調整である。A面の左側縁部やB面中央には、段階状剥離が存在する。

A39は剝片 第VII層 K09 Y K地区出土、長さ3.2cm、幅2.5cm、厚さ0.8cm、A面右側面には、段階状剥離が数ヶ所みられる。A面下端部とB面上端右側には、打点がある。B面左側は、縦方向に割れた状況にある。

A50は剝片 K14D J地区出土、縄文河道、緑灰色シルト層（粘質土含む）T.P.24.2m（G L -3.2m）出土、両面ともネガティブな剥離面であり打点はいずれも自然面の残す方向から行われている。両打点でのくぼみは、バルバスカーである。リング、フイッシャーは、共に明瞭に残存する。

A51は剝片 第VIII層 K09 A K地区出土、長さ1.8cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、B面よりA面の方が剥離面多い。上に打点部分である。B面上端部には、打点がみられバルバスカー状の剥離が明白である。この剥離面は、他の剥離面に比して多少新しく剥離したらしく風化状態が異なる。

A54は剝片 第VIII層 K14 A N地区出土、長さ3.2cm、幅1.65cm、厚さ0.45cm、サヌカイト製、リングの明白な剝片で両面下端部には、段階状剥離がみられる。明らかなネガティブな剥離のわりには、打点が見当たらないことから他の石片の剥離と共に剥離した。この剥離は、節理に左右されて割れている。

A78は剝片 第VIII層 K14 A N地区出土、長さ3.45cm、幅1.0cm、厚さ0.7cm、本来あるべき打点の部分には、左下がりの石目がある。このチップも他の剝片と同時に剥離したものである。A面左側面には、段階状剥離があり下部には発掘時の剥離をつけてしまった。リング、フイッシャーは良く観察できる。A33・A50と共に自然面を残すプラットホーム状を呈しており不定形刃器として利用出来るであろう。

A79は剝片 K09 A K地区出土、第VII層下層、長さ3.1cm、幅1.2cm、厚さ0.7cm、サヌカイト製、一見、石錐の末製品と思われるが今のところ判定する材料がない。風化の度合は、普通である。B面左上端部に打点がある。全体的に剥離に統一性がない。A面右側面には、数ヶ所の石目に沿って段階状剥離がみられる。

A106は剝片 第II層（中世包含層）K09 VW地区出土、長さ4.3cm、幅4.5cm、厚さ1.3cm、数ヶ所（黒く塗りつぶした部分）の発掘調査時における剥離が知られる。両面には、自然面が残る。断面でみると中央部に稜線をもってバランスがとれている。右側面は、両面ともネガティブな剥離で使用痕がある。

その他の石器

A144は長さ10.7cm、幅6.9cm（約半分に割れている）厚み3.7cm、橢円形の川原石で一面のみ多少摩耗しており他面より扁平である。K14ACJ区出土、第Ⅶ層。

A145は砂岩 長さ9.5cm、幅9.4cm、厚み6.1cm、平面形も断面形も台形である。4面に少しづつへった感じがある程度である。この石の近くから木炭片が共伴している。

縄文時代河道B地区（第22図 図版13）

河道の幅は後の古墳時代河道により大きく削りとられており不明であるが、深さは概ね1.6mである。埋土は、急激な流れの状態を示す不安定なブロック状の砂礫が目立つ。

切り込みのベースは、縄文時代第1次面のベースでもあった明黄褐色粘質土である。上辺高は、T.P.+26.15mである。

河川流路B599-O R（第22図 図版14）

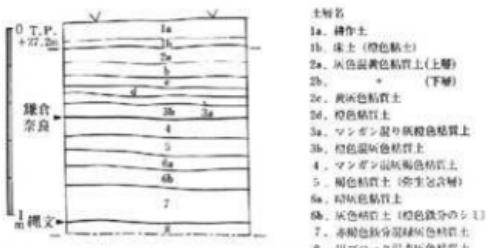
B1区下層で確認した自然河川である。トレーンチ東壁から始まり、北の台地を激突面として東から北に弧を描くように調査区外へ抜ける。縄文流路は右岸を確認したのみで左岸及び本流は古墳時代の流路B56-O Rなどに削られている。よって正確な川幅は明らかではないが、流れからして本流は十数mであったと推定する。深さは、北肩部から測ると約3mである。河川は、一度の流れと言ったものではなく、幾度かの大きな流れが観察された。断面観察によると四回の流れがあるようである。また、岸辺は激突面からえぐられていたが流れは台地を肩にしたものではなく、台地もろとも水が流れている状況を示す。

本流の埋土は、基本的には砂礫層でかなりの水流が想像される。その間層として微砂が堆積しており、洪水後の緩やかな流れも想像される。河川内からの出土遺物はないが、流れと方向からA地区のA1・2-O Rにつながっていたと思われ、縄文晩期の河川と比定される。

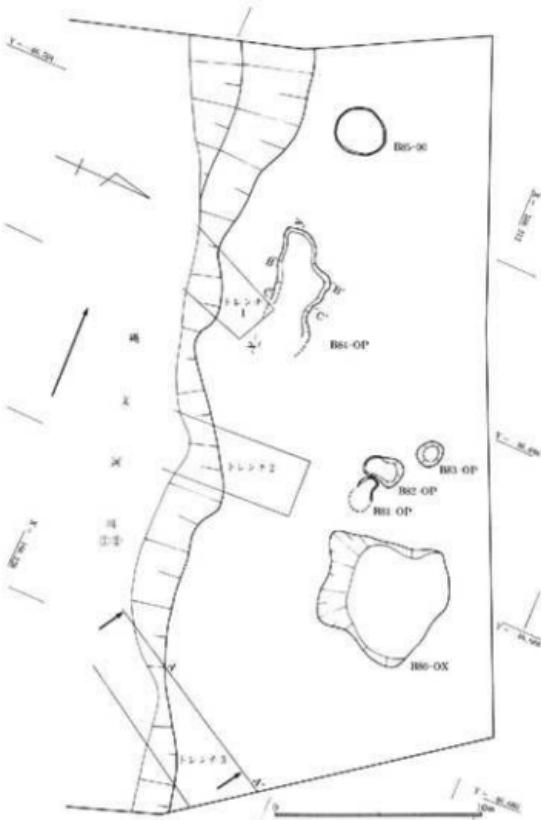
河川の底面はほぼ平坦であるが、植物遺体を含んで樹木が流れの方向に横たわっており、岸辺近くでは渦が巻いていて流れは若干緩やかであったようである。この樹木は上流から流されたものであろうと思われ、直徑50~20cmの樹木が多かった。

B80-O X（第21・23・24図 図版15・98）

B1区K14CD~DEの縄文下層面で検出した。ベースである青灰色シルトに掘り込まれた浅い落ち込みである。人為的な遺構と言うよりも、自然の落ち込み・壅みの可能性がある。長辺約6.5m・短辺約5.3mを測るが、北辺の肩は明確ではない。埋土は明赤褐色砂質土で、部分的に炭混じりのオリーブ黄色粘質土が覆っていた。深さは、検出面から20~10cm程度である。



第20図 B地区・縄文・奈良・鎌倉時代検出面・基本層序 (K14 E G)

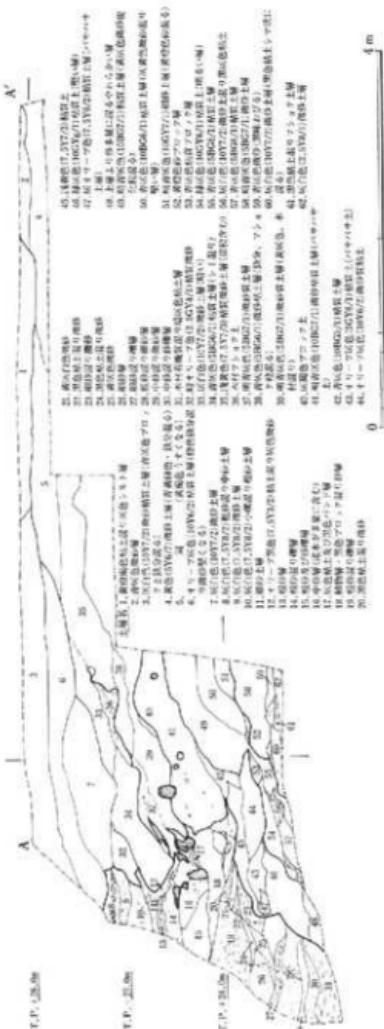


第21図 B80-O X、B81~84-O P、B85-O O 遺構全体図

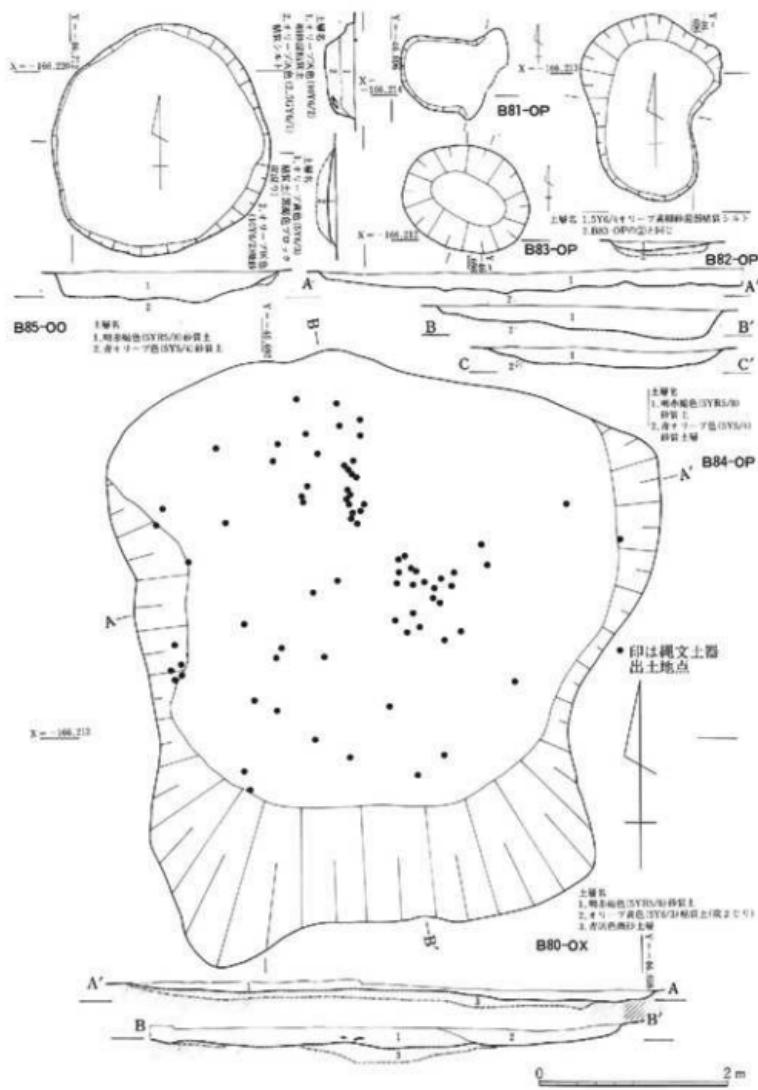
遺物は、縄文土器細片とサヌカイト数片が覆土に包含されて出土した。ほとんどの土器は摩滅が激しく、埋土と同化していたが、出土地点をドットでおとすと第23図のようになる。突帯の解る10点を図化した。土器の大半は生駒西麓産の胎土を持つ、いわゆるチョコレート色の土器である。B875は底部の破片である。復原底径約3.3cmを測り、中央部を薄く仕上げた粘土盤を底面とする。B868は浅鉢の肩部の破片と思われる。B871・B870・B866・B874は深鉢の破片と思われ、刻目突帯文が口線上端部に巡る。B867・B869・B872・B873は深鉢の体部の破片である。肩部の刻目突帯文は三角形で、刻目が粗いものと細かいものとがある。これらの縄文晩期の土器片は、細片ばかりで摩滅も激しく、形態を细分することが困難であるが、長原式の範疇に入るものである。

B81・B82・B83・B84-O P (第21・23・24図 図版14・98)

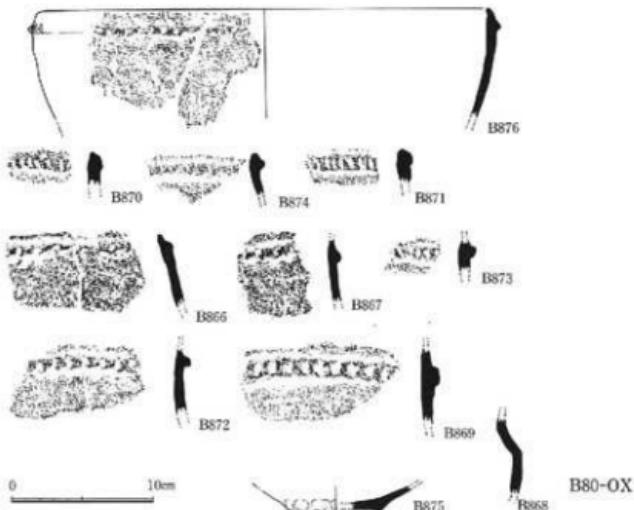
B1区K14DC～DD・FBの縄文下層面の青灰色シルトで認められた浅いピット群である。B81・B82・B83-O Pは、径1.8～1.0m程度、深さ約30～10cmの浅いピットである。埋土はオリーブ黄色粘質土で黒褐色のブロックや炭が混じっている。B84-O Pは長径約4.5m・短径約3.0～2.4mを測り、明赤褐色砂質土を



第22図 縄文河川：トレーンチ3・土層断面図



第23図 B80-OX・B81~B84-OP・B85-OO遺構図（レベルはT.P. +26.00mである）



第24図 B81-O P (B876)、B80-O X出土遺物

埋土とする浅い窪みである。B81-O P の底面で繩文土器片が出土したのみであった。

B876は縄文晩期の深鉢の口縁部の破片である。復原口径約16cmを測り、胎土に2mm程度の石英・長石や角閃石・金雲母を含有する。口縁部のやや下がったところに刻目突起文が付くタイプである。磨滅が激しいが、器面調整はナデとケズリによると思われる。長原式の範疇に入るものである。

B85-O O (第21・23図 図版14)

B1区K13FYの青灰色シルト層を切って確認した。径約2.3mを測り、深さは約30cmである。埋土は、明赤褐色砂質土であった。この土塙は、他の縄文遺構とは違って断面の立ち上がりがしっかりしており、底面も比較的平らであった。しかしピットなどの窪みは見あたらず、単なる土塙と思われる。遺物は、縄文晩期の土器細片が1点土塙肩部にへばり付いて出土したのみであった。

第2項 弥生時代

A102-O S (第25図)

西側溝上辺のベースは、下層とともに水平堆積で灰黄色粘質土である。ところが、東側溝肩は、下層の縄文時代の溝に堆積したブロック状の不安定な埋土である。幅1.4m、深さ0.75m (T.P.25.87m) 埋土は、1層で静水状態を示す。溝斜面は、多少の小さなブロック状の流れ込みが知られる。

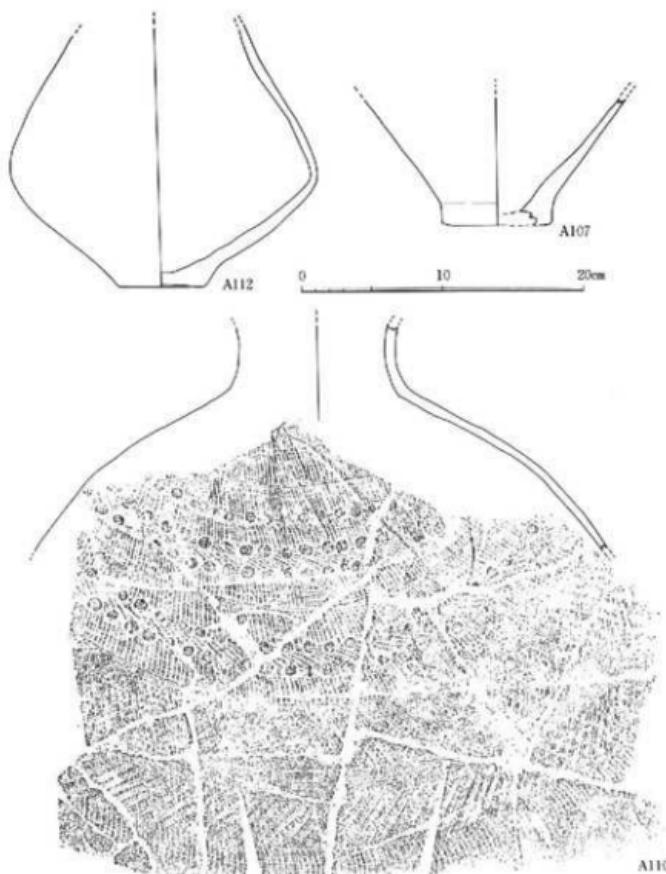


第25図 A47・102-O S 土層断面図

弥生土器 (第26図 図版100)

大庭寺遺跡からは、縄文・弥生時代の土器がこれまで少なからず出土している。ここに述べる3点の土器はA地区から出土したもので、2点 (A107・A112) は包含層から、1点は造構 (A102-O S) から出土し、溝造構も確認・検出されている。このような本遺跡のように石津川流域には多くの弥生時代の遺物出土地点や遺跡があり、今後も遺跡の広がることが予想される。

A107は壺・壺類の底部～胴下半部である。残存度は約1/4である。器体各部のうち残存高は約9.0cm、底径7.9cm、底部の厚さ1.0cm、器壁の厚さ0.5cmを測る。焼成は良好、質は堅緻、色調は外面がにぶい橙色、5 Y R6/4、内面が灰白色2.5 Y 8/2を呈する。胎土に含



第26図 A102-O S、第VII-C層出土遺物

む砂粒は、2mm前後の砂径の有色亜角礫を最も多く含むが、量自体はさほど多くない。いわゆる、この土器は、砂粒の少ない土器である。調整がうかがえるものは、外面にヘラミガキがわずかに残る。

A112は、壺の体部～底部である。器体表面はいちじるしく風化が進み、調整手法や文様の観察は困難である。残存部分の法量は、器高18.6cm、胸部最大径21.6cm、底径5.9cm、底の高さ1.5cm、器壁の厚さ0.5～1.0cm、底の厚さ0.9cmを測る。焼成・質は普通である。

色調は、内・外面とも灰色～灰白色である。胎土は、2～3mmの礫物を少し含み、この他5mmの大有色亜角礫や赤色粒も散見できる。

A110は大型壺の体部で、口頸部と底部は欠損している。残存部分の法量は、体部径63.66cm、器壁の厚さは0.7～1.1cmである。焼成は良好である。色調は、内外面とも灰白色～にぶい橙色である。胎土は、0.5mm以下の微細な有色亜角礫がかなり多く赤色粒を含む。1mm以上の大きさの粒径のものはきわめて少ない。

調整は、外面はヘラミガキとナデ、内面はナデが残っている。

文様は、体部中央～頸部にかけて各種櫛目文と円形浮文がつけられている。櫛目文は、17条の施文具を用い、施文幅2.2～2.5cm、文様帶の間隔は約2～3mmで上下のバランスを保っている。各部の文様は次のとおりである。

頸部の文様帶のうち下位の部分につけた文様帶はすべて簾状文で、最下帯には簾状文がつく。腹部最上段の文様と頸部最下段の文様は同じ文様＝簾状文を施文するが、文様帶間に円形浮文貼付することによって区分している。

腹部の文様帶は全部で14帯である。文様は櫛目文を中心に円形浮文を付加した4段の文様帶からなり、各段の文様帶は2種類の櫛目文を使い、一部は先述した円形浮文をついている。

一、二段目の文様帶の構成は次のようになる。

1 簾状文

+ 2 円形浮文

3 扇形文

+ 4 円形浮文

5 簾状文

のように二段目の6～10帯目の文様構成も一段目と同じように同一パターンを繰り返し、さらに各文様の占める空間と配分は同一である。

三段目の文様帶構成は次になる。

11帯目 斜格子文

+

12帯目 直線文

四段目は

13帯目 斜格子文

14帶目 瓢状文

になるが、三、四段目とも円形浮文を欠くが、共通の斜格子文をつけながら、その直下にくる文様は、直線文と瓢状文のように微妙なアクセントを加えている。

また、各文様帶と4段の文様区分を行なうにあたって、1～3段目は6.1～6.5cm、4段目は5.5cmの文様空間と配分を行なっている。これらは、ただ単に施文具が同一性を指摘するよりも、壺の腹部上半に計画的に割付けし文様構成をしたものと考えられる。

最後にここの土器の特徴は均整のとれた整美な櫛目文をつけ、最下段には瓢状文をつける等文様上の特色がみられる。このような、特色ある文様をもつ土器は、和泉地域の弥生時代遺跡出土土器の主要な文様とは異なる。他地域で出土している文様および文様帶構成をとるものに類似品を探すことができる。

A138は、灰色～灰白色(7.5Y8/2)を呈し、焼成はやや不良である。胎土は、3～5mmの並角礫を含むが量は多くなく、良質の粘土を使用している。(図版100)

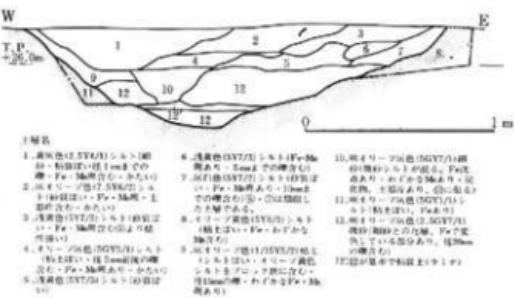
A118は緑色片岩製の石庖丁の末製品であろう。法量は、横13.8cm、縦5.7cm、厚さ1.4cmを計る。表面は風化が進み、刃部背部の調整は不明瞭だが、背部側より刃部側が部厚い。また、背部中央の凸部の剝離痕は他の剝離痕より新しく、後世のものであろう。(図版100)

A103-O S (第27図・図版17)

調査口縁部の中央北側で検出した溝でA102-O Sと一連の溝になる可能性がある。幅4.5m、深さ1.1mを測る。調査区外の北側に伸びる。断面形状はなだらかに落ち込む。堆積土の状況からは水の流れはないようである。概ね、東側から埋まったようである。出土遺物は弥生畿内第三様式の土器が出土している。

A地区出土植物根痕 (第28図 図版18)

弥生時代の各遺構(A102・103)が検出された遺構面よりも更に下層面で検出した不定形の小さい穴である。平面でみれば規則性はないが全体的にみられた。径10～15cm、深さ5～10cmと様々である。各穴からは遺物は出土しない。規則性をもたず不規則に検出され



第27図 A103-O S 土層断面図

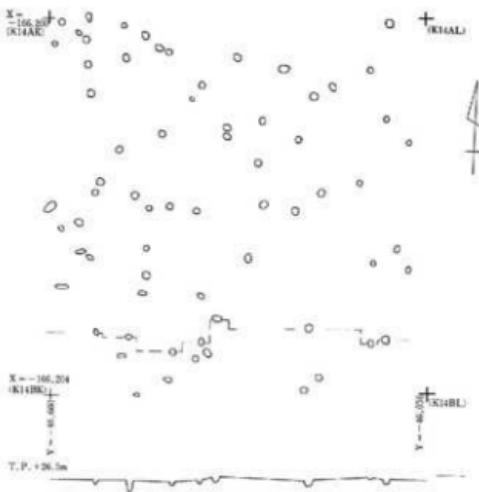
る穴の性格であるが、大きさと上層の茶褐色系粘質土と同じ土質が埋土として入っていきたことからみて縄の根株と考えられるのではないかとのご教示を大阪文化財センター小野久隆氏から得た。

B47-O D (第29図 図版19)

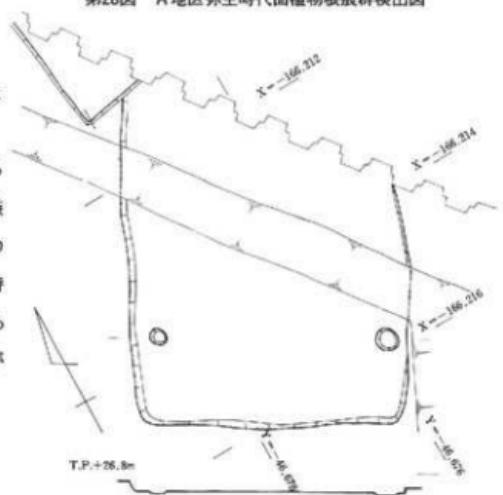
旧河道右岸の古墳時代包含層を取り除いた面で検出した。南北辺5m(東西辺は矢板によって切断されているため不明)を測る。プランはやや長方形を呈する。上面はかなり削平を受けておりたちあがりは検出面から約10cmである。壁直下には僅かに溝が巡る。柱穴は二本検出したにとどまり、炉も検出されなかった。遺物はほとんど出土しておらず、高杯の脚部1点と石鎌(B683)が1点出土したのみである。古墳時代か弥生時代か判断の難しいところであるが弥生時代後期の可能性が高い。

B地区出土の石器 (第30図)

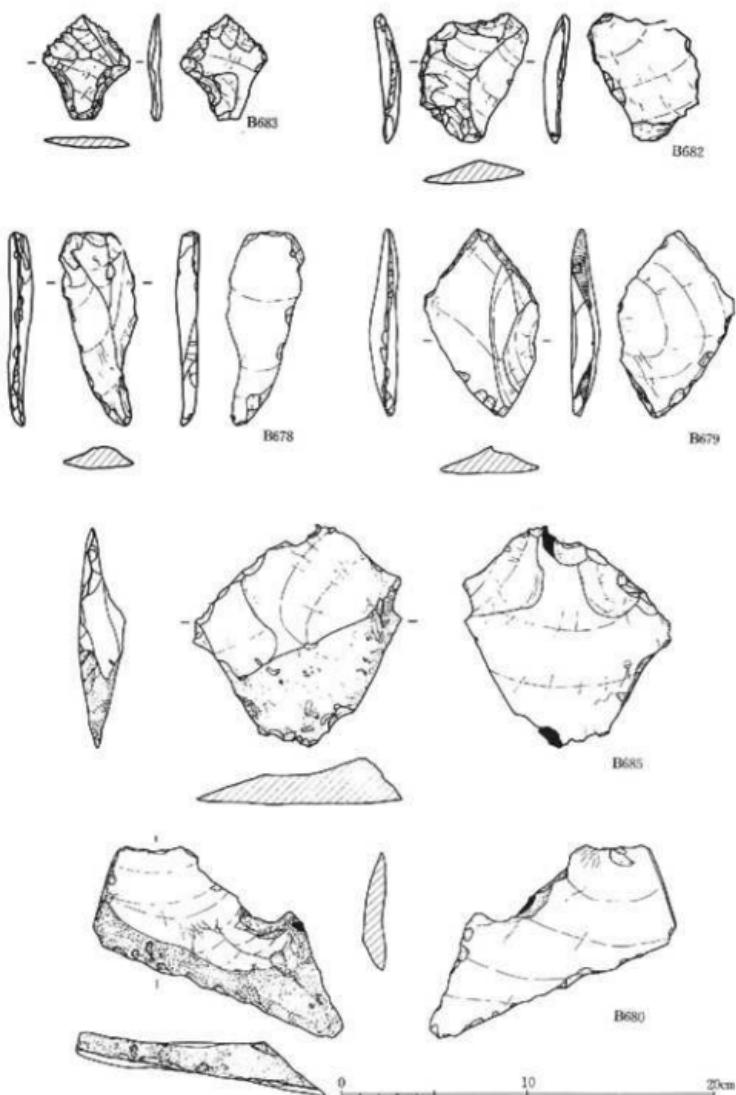
石器は近世包含層から出土したもの (B677・B684・B



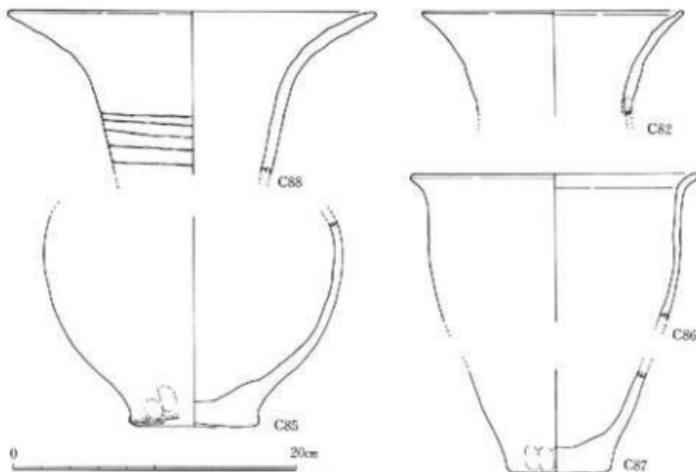
第28図 A地区弥生時代面植物根群検出図



第29図 B47-O D 遺構図



第30図 B47-O D (B683) + BC56-O R (B678・679・680・682・685) 出土石器



第31図 C地区出土遺物

681) B47-OD (堅穴住居跡) から出土したもの (B683)、B・C56-OR (河道) から出土したもの (B682・B678・B679・B685・B680) がある。B47-OD から出土したのは石器で他はいずれも不定形刃器である。石材はすべてサヌカイト製である。

C地区出土の土器（第31図）

C地区では弥生時代の遺構を確認することができなかったが、2箇所において土器が出土した。ひとつはK13V S付近のT.P.26.1m前後の地点であり、もうひとつはK14X B付近のT.P.27.1m前後の地点である。

土器はいずれも破片であり、復原しても完形になるものはなかった。

第3項 古墳時代

B76-OW (第32・33図 図版23・24)

旧河道右岸に堆積したシルト層を掘りこんで作られた素掘りの井戸である。検出状況からは木枠等の痕跡は認められない。検出面のレベルはT.P.+26.4mである。プランは梢円形を呈し長軸1.5m、短軸1.4m、深さ1.3mを測る。断面から見ると上方がやや開きぎみであるが、下方は垂直に掘り込まれている。底の形状は平らで径は約0.5mを測る。

堆積は8層に分層が可能で第32図に示した通りである。第1層のN4.5/0灰色シルト質

粘土には多量の炭を含み最下層の第8層の10Y5/1灰色シルト質粘土は堆積が厚く45cmある。土層の観察からは人為的なものでなく自然による埋没と考えられる。

遺物は第1層～7層までは含まず第8層つまり井戸底から6個体分の古式土師器の甕が検出された。完形に近い甕が1点あるが他の5点は何れも口縁部か胴部上半が欠落しており祭祀的色彩が強い。

甕B333を例にとると口縁部が「く」の字に外反し端部はつまみあげ、胴部は球形を呈し器面は細かいハケメによって調整され、上半には横方向のハケメが巡る。内面はヘラケズリによって丁寧に調整され、したがって器壁もかなり薄く仕上げられている。他の5点の甕も個体差こそあれ概ね同様と考えて差しつかえないと思われる。

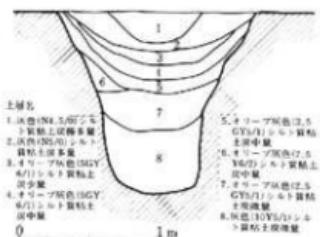
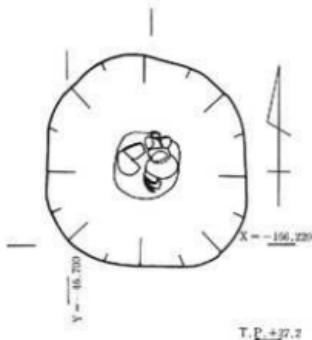
これらの一群は以上の観察から布留式土器のなかでも古相に位置付けることが可能である。

C666-O S (第34図：図版19) K13V RからK13W Sに位置する。北西から南東方向にやや西方に膨らみながらのびる溝である。北西部では幅1.7m、深さ1.0mで断面は台形を呈するが、南東へ行くに連れて徐々に浅くなり、B・C132-O Rで切られている付近では幅1.7m、深さ0.7mで断面は深いU字形となる。埋土はシルトと砂礫で構成される。出土遺物は甕(C80)1点と、ミニチュアの甕(C81)1点がある。

C668-O S (第34・35図 図版19) K13W Sから北西方向に延び、K13V Rで方向をかえ北側に延びる。幅1.2m、深さ1.6mを測る。断面はU字形で埋土は緑灰色(5G5/1)シルトである。

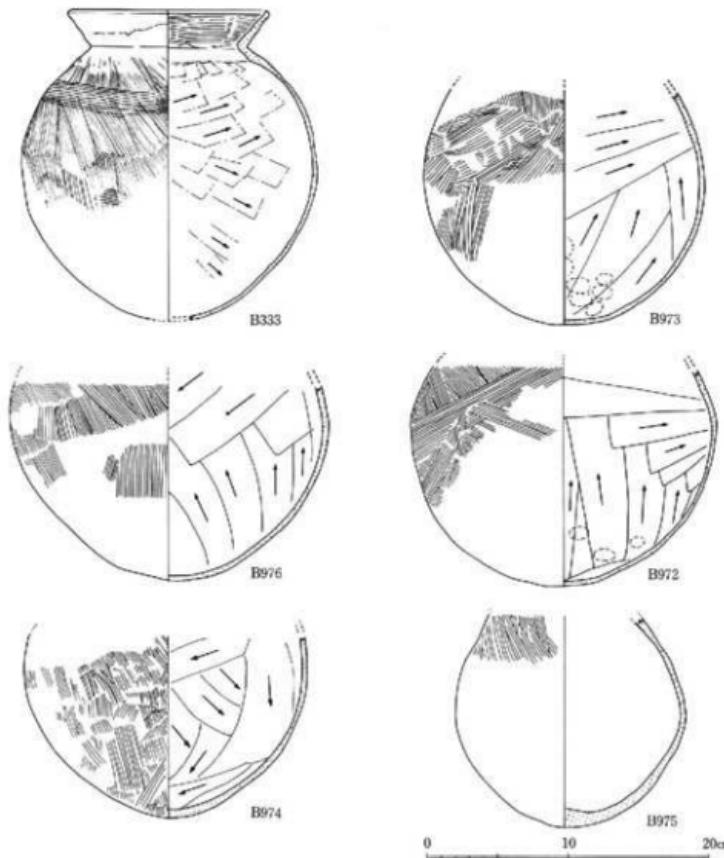
この溝からは、(第35図)に示す甕(C134)が出土した。この土器は溝の中程で、転げ込んだ状態であった。

B1-O R (第36図 図版27)



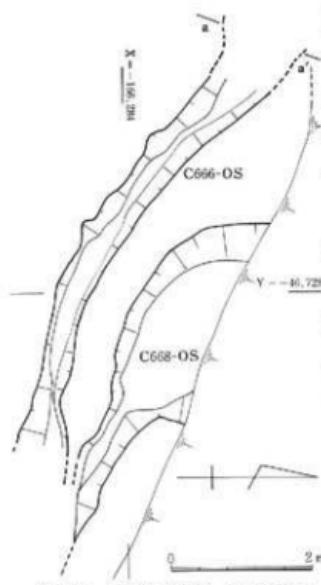
第32図 B76-OW遺構図

上層名
1. 黒色(10YR 5/1)シルト質粘土層
2. 黄褐色(10YR 4/1)シルト質粘土層
3. 黄褐色(10YR 4/1)シルト質粘土層
4. 黄褐色(10YR 4/1)シルト質粘土層
5. 黄褐色(10YR 4/1)シルト質粘土層
6. 黄褐色(10YR 4/1)シルト質粘土層
7. 黄褐色(10YR 4/1)シルト質粘土層
8. 黑色(10YR 5/1)シルト質粘土層



第33図 B 76-O W出土遺物

旧河道の中で最終段階の河道でB・C132-ORが埋没した後、方向を同じくし河道の左岸寄りを南東～北西へと流れている。B 1-ORはB・C56-ORの埋没後堆積した明青灰色シルト質粘土層を切って流れる。川幅は約4m、深さ約2mを測る。埋土は砂と砂礫の互層となるが、概ね上層が砂層で下層が砂礫層となる。遺物は上層・下層関係なく多量に検出されている。出土した遺物は全て須恵器で、当然のことながら杯身、杯蓋が多く直口壺、台付直口壺、甕がある。



第34図 C666・C668-OS遺構図

れを平面的に捉えることはできず、平面で捉え得たのはB・C132-OR、B1-ORである。

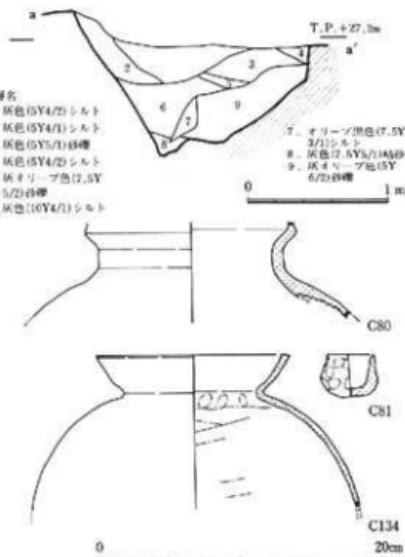
おおまかな観察では弥生時代～5世紀後半ではB・C56-ORのほぼ真中を当時の河道が流れ、5世紀末～6世紀前半では河道は北側を流れていたと考えられる。6世紀中頃のB・C132-ORは一変して河道の南側を流れていたと考えられる。そのためB・C56-ORの右岸寄りは後背湿地となって約1m余りのシルト質粘土層が短期間に堆積する。

6世紀中頃のB・C132-ORの埋

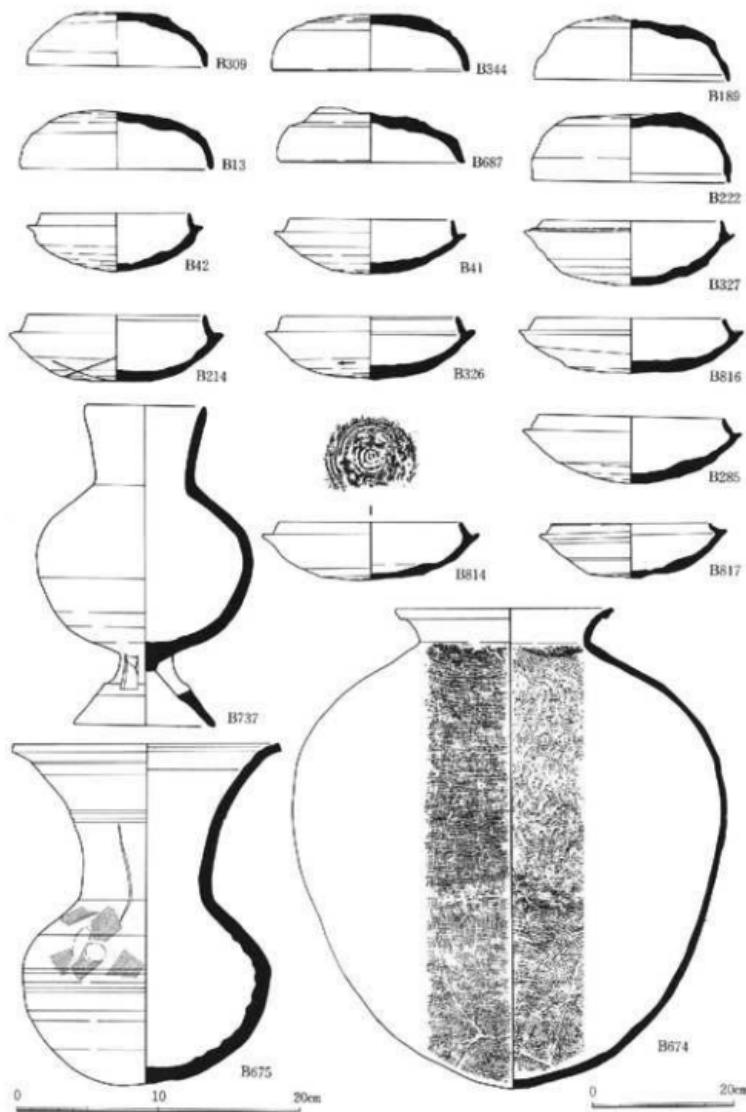
B・C56-OR (第37～53図 図版29～37)

梅丘陵の東側縁辺部に沿って南東から北西へ流れる河道で、現在は南から北へと流れる石津川の旧河道にあたる。川幅は最大幅で約60m、深さは約4～4.5mを測る。

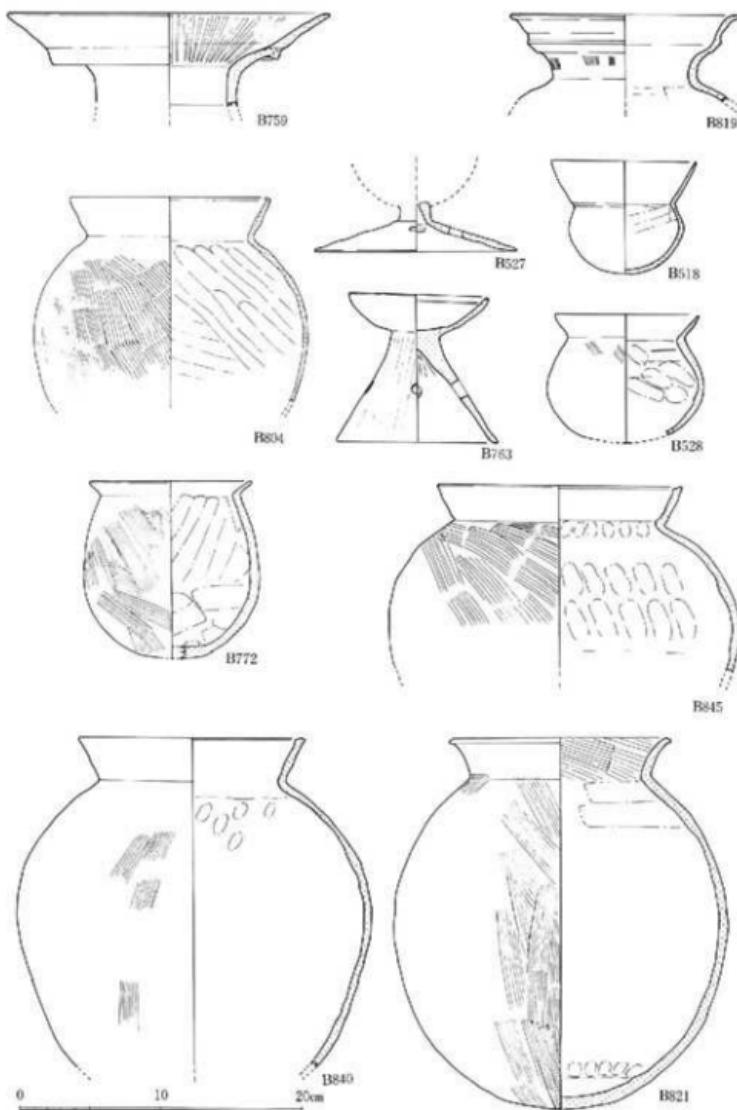
埋土は概ね第1層が青灰色シルト質粘土層、2層が有機物を多く含む黄灰色粘質シルト層、3層が粘土ブロックを含む砂疊層となる。この3層の下には方向を変え、縄文時代以前の幅15～16mの河道が認められる。B・C56-ORの上限はその出土遺物から弥生時代中期に遡る可能性があり、下限はB1-ORと呼称する6世紀末の河道をもって終息する。出土する遺物、あるいは土層の断面観察からは都合、5回程の河道を確認することができる。しかし、こ



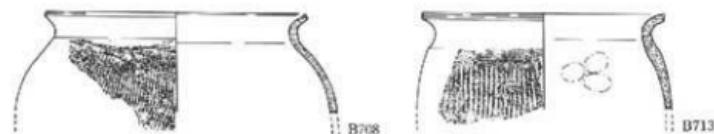
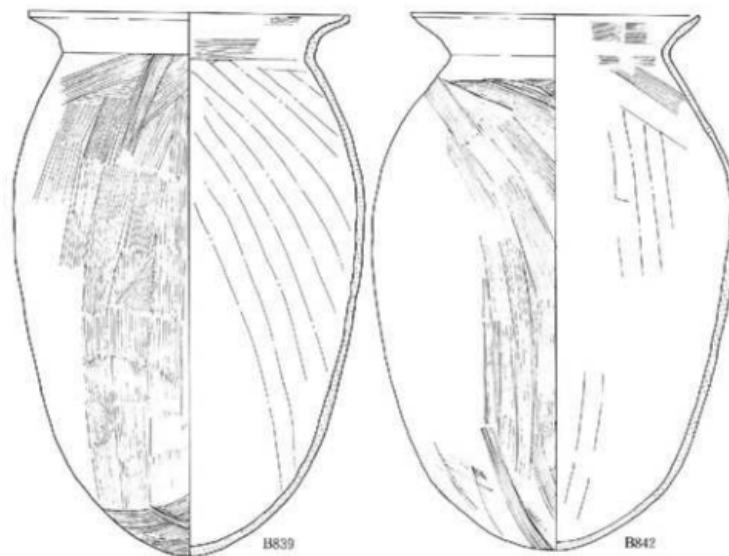
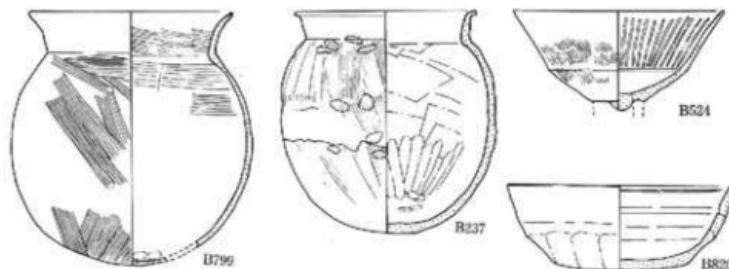
第35図 C666-OS土層断面図・出土遺物



第36図 B1-OR出土遺物

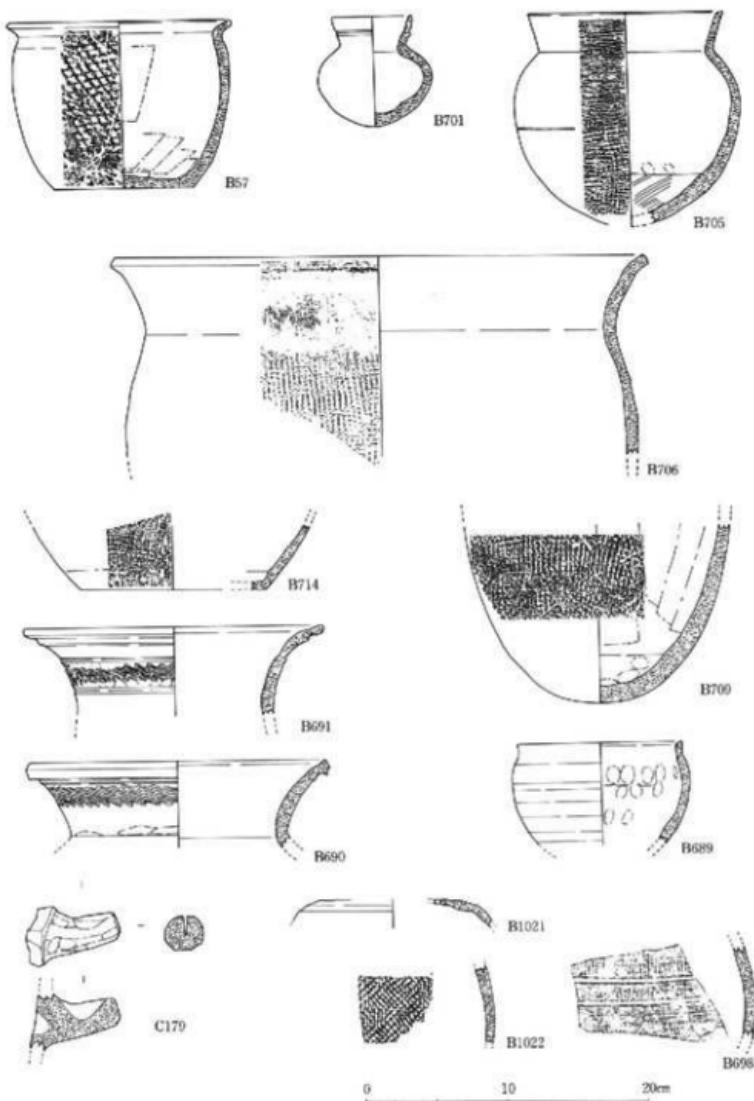


第37図 B+C56-O R出土遺物

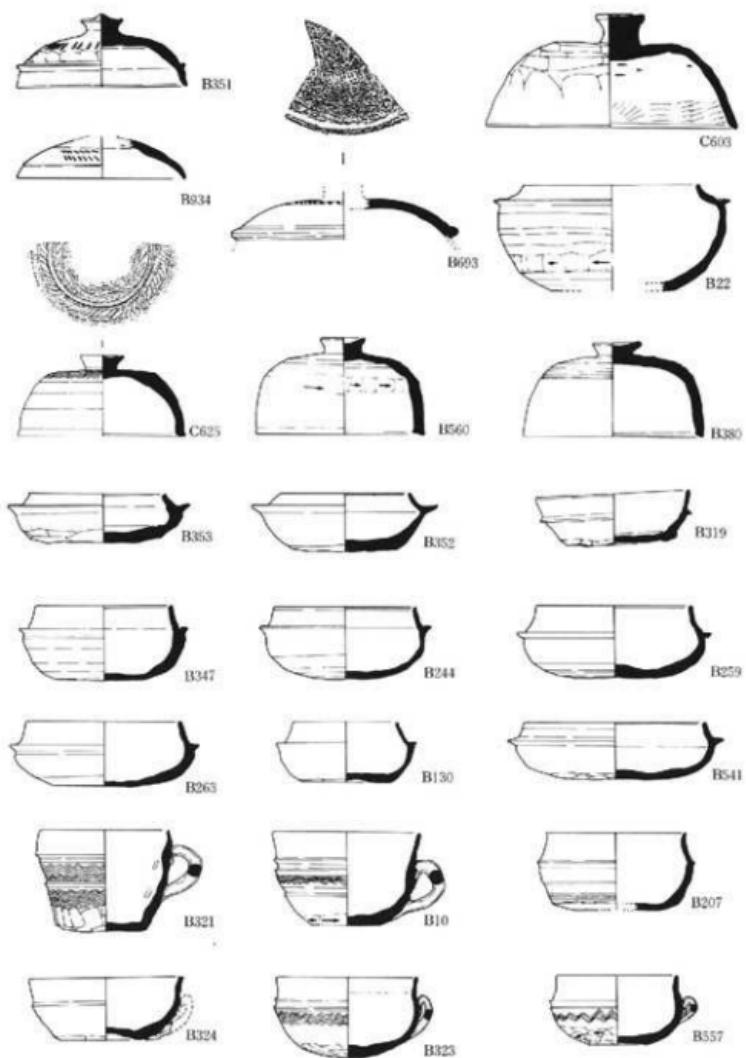


0 10 20cm

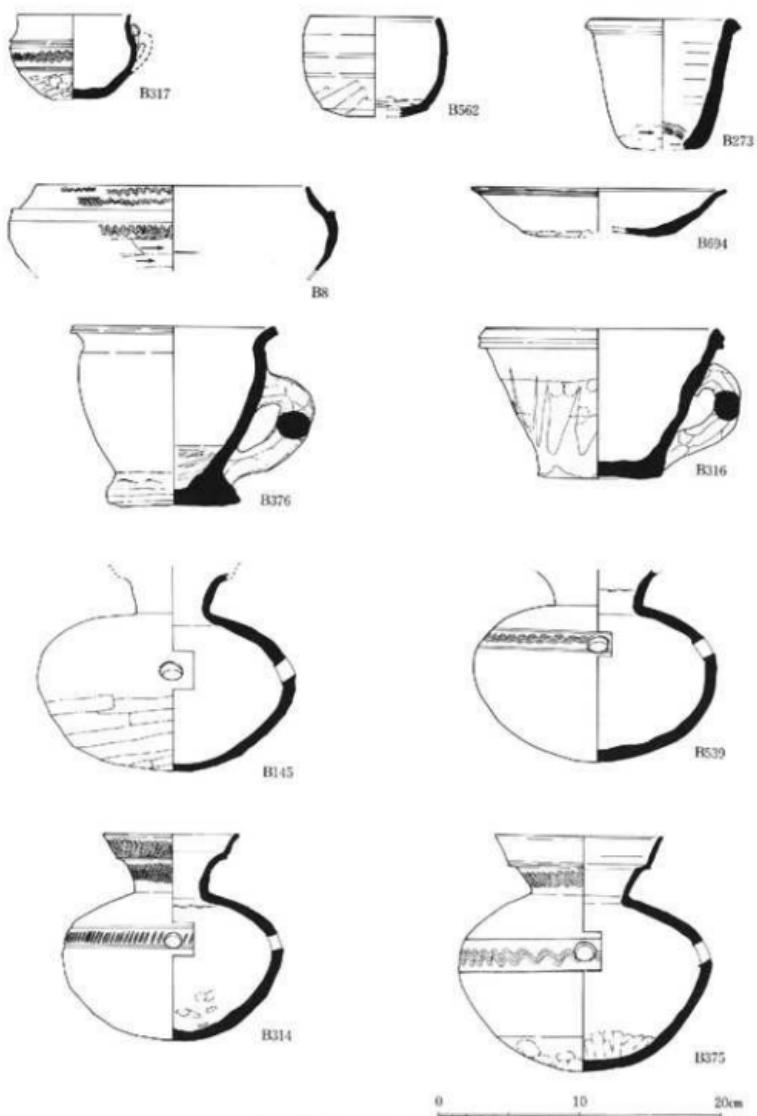
第38図 B+C56-O R出土遺物



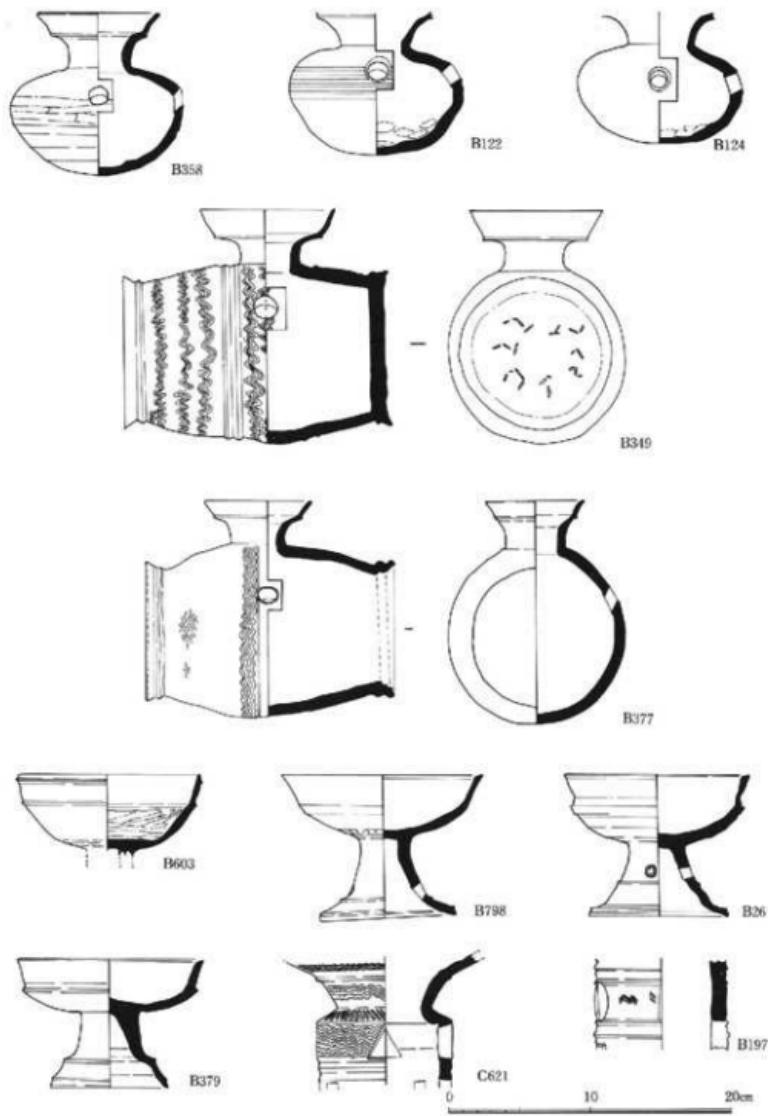
第39図 B・C56・OR出土遺物



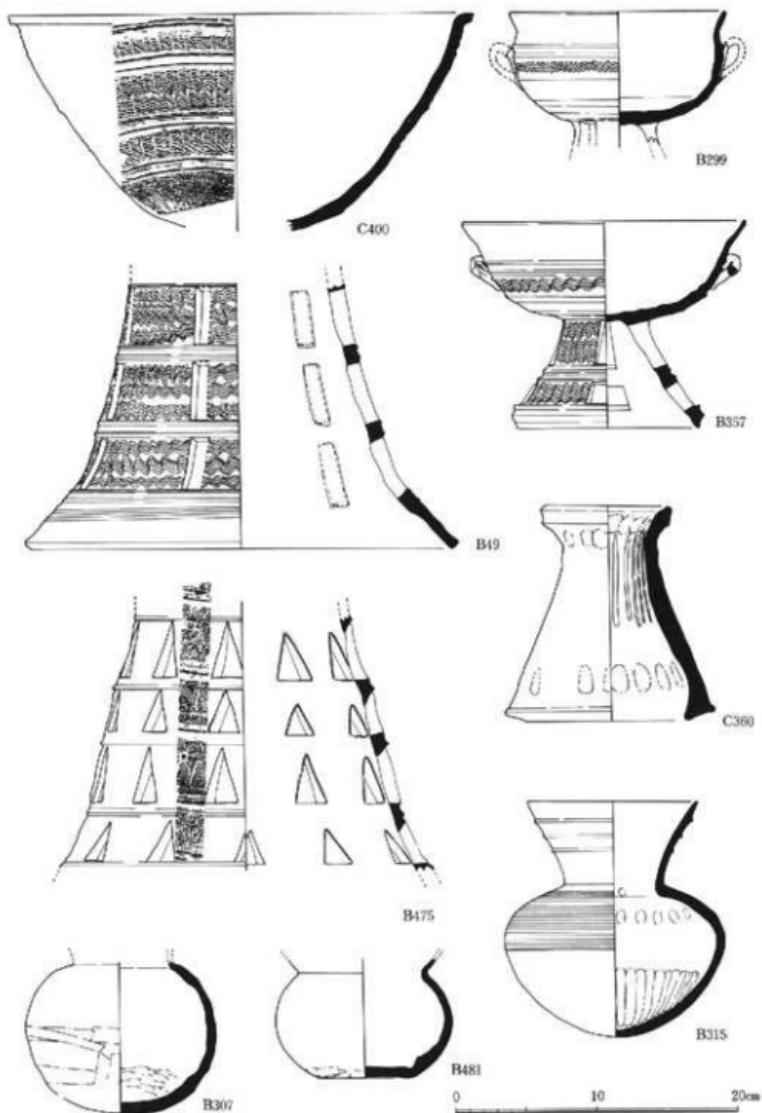
第40図 B・C56—O R出土遺物



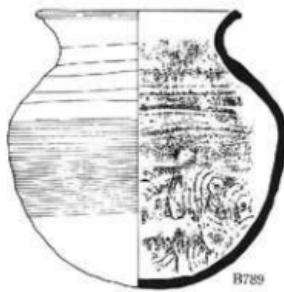
第41図 B+C56-OR出土遺物



第42図 B・C56—OR出土遺物



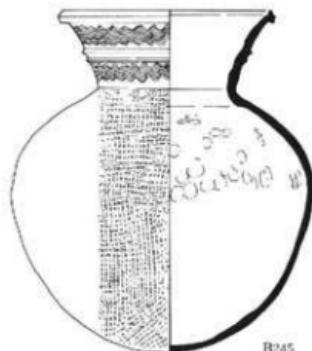
第43図 B+C 56-O R出土遺物



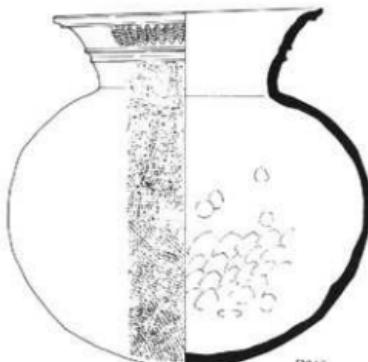
B789



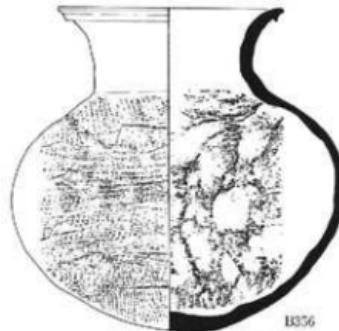
B335



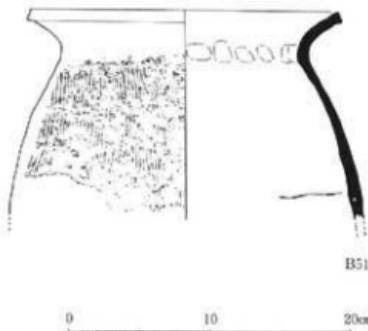
B245



B246



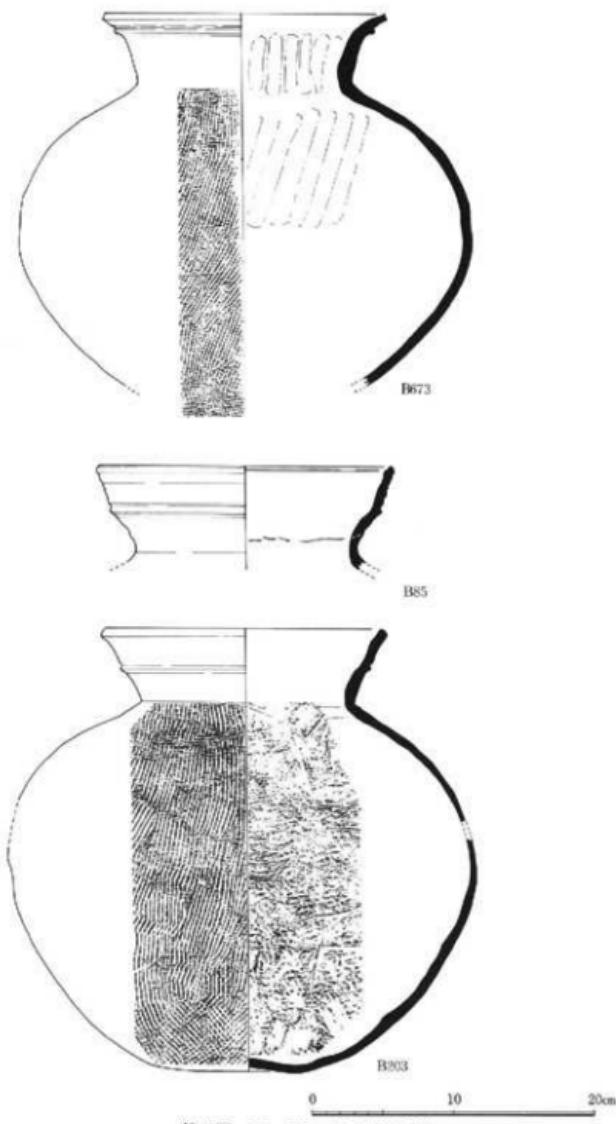
B356



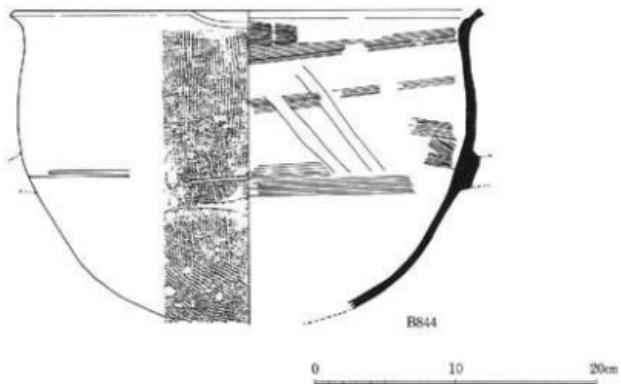
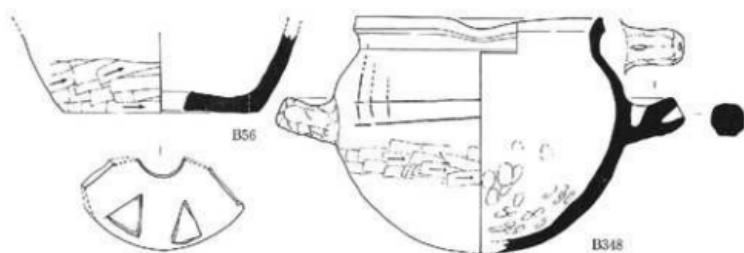
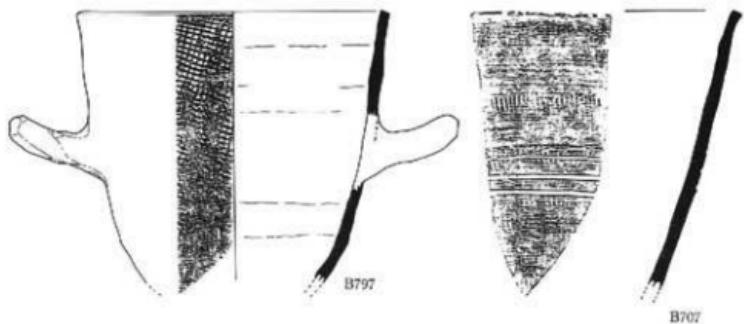
B51

第44図 B・C56—OR出土遺物

0 10 20cm



第45図 B+C 56-O-R出土遺物



第46図 B・C56—OR出土遺物